

心と精神に関するアランの手紙について (I)

山井 徳行

A Propos des LETTRES D'ALAIN SUR LE SUJET DU COEUR ET DE L'ESPRIT (I)

Noriyuki YAMAI

序 論

フランスの哲学者アラン (1868年～1951年) にはアンリ=マンドール (Henri MONDOR) という医師の友人がいた。彼は、外科医として有名であったが、後に歴史家・文芸評論家としても活躍し、1945年にはフランス学士院会員に選出されている。

医者とは、特に外科医は人間を精巧に構築された物として扱い、哲学者は反対に思考する主体として認識する。しかし、良心的な医師は人間を単なる複雑な機械としてのみ扱うことに疑問を持つであろうし、同じく洞察力に富む哲学者は人間から身体を安易に切り離さないであろう。考えてみると、医者の対象は病気であり、それは肉体にある。しかし、人間は単に、肉体にのみ還元されえない。心あるいは精神と呼ばれものが存在する。哲学者とは端的に言えば、思考する者である。自己を理性的存在にとらえるのは一種の本能のようなものである。しかし、自分の意志で容易に制御しえない情念が自分の中に巣くうことを否定できない。デカルトはその問題を名著『情念論』の中で、身体の精神に対する干渉として見事に描いてみせた。

デカルト的な二元論か、それともスピノザ的な一元論の立場に立つのか。あるいは、精神を脳に還元する近代科学的な唯物論をとるのか。アランは、近代哲学のこの難問に関して理論的なアプローチをせずに、彼独自の詩的なとも言われるべき分析と総合を行っている。理性による論証によって、ほとんど解決不可能のこの問題は、不可能だからといって打ち捨てられるには余りに人生に深く係わっている。

人間に関して、哲学者として迫るアランと医師として冷徹に係わるマンドールの間で、かなり突っ込んだ議論が交わされたことは想像に難くない。少なくとも、マンドール宛の九通の手紙が残っている。アランはその中で、「知るためには、愛さなくてはならぬ (il faut aimer pour connaître)」と書いて、正しい知覚のために愛の必要性を唱えている。恋愛論ならば、それほど奇異に聞こえないであろう。しかし、我々の愛に全く無関心の自然界の認識にも、愛が必要なのだとアランが言うとき、我々は一つの大きな謎の前に立たされるのを感じる。

その手紙は、マンドールの著作『アラン』の中に収められているし、一般にプレイヤード版といわれる叢書 (BIBLIOTHEQUE DE LA PLEIADE) の一卷、『芸術と神々』 (Les Arts et les Dieux) という本の中にも「LETTRES AU DOCTEUR H. MONDOR SUR LE SUJET DU COEUR ET DU L'ESPRIT」 (pp.721～744) というタイトルで再録されている。

小品ながら、医師である友人に哲学者としてのアランが語りかけるという形式の作品には、

思考における主体と客体の関係に関して興味深い考えが簡潔に述べられている。この論文では、その内容を検討して、客体としての世界の知覚と主体としての人間の愛の関係に関するアランの洞察を出来るだけ明らかにしたいと思う。

残念なことに、この作品は一度も翻訳されたことがなかった。そこでまず、この作品を試訳した上で、検討したいと思う。手紙というと易しいと思われるが、アランの詩的散文は予想よりもはるかに翻訳が困難であった。訳の生硬さは著者の責任である。幸いなことに、内容の検討によって訳の不十分なところを補うことが多少なりとも可能だと思われる。底本には、GALLIMARD社から1953年に出版されたMONDOR著『ALAIN』を用いた。分析の都合上、原著にはない手紙の番号を(第一の手紙)(第二の手紙)等々という形で示した。

第一部 『心と精神に関するアランの手紙』の試訳

(第一の手紙)

1923年の復活祭の日曜日

親しい友よ、私が正しいと考える判断を弁護するようにとあなたは望んでおられる。その判断とは、折りよく示されて規則に成ったと同時に範例にも成ったものだった。すなわち、その日、二人とも時間の余裕が無かったが、あなたの旺盛な好奇心に答えて、私は次のように言った。診断するためには、診断とは知覚であり洞察でもあるが、我々の存在を支配し、観念と記憶に富み、当然公正で冷たいあの悟性と全く同様なほど、我々の存在をのびやかにするあの寛大な愛が必要であると。このような見方は新しくはない。現代の全ての宗教がこの見方を発展させた。それがすべての神秘性の根底である。しかし、それはまた教条的に、すなわち証拠なしに、証拠に反してさえも希望するということにすぎない。私はこの道は採らないし、私の知っている限り、あなたも同じであろう。そこから、この主題の全ての困難さが出て来る。その困難さの中で、実証精神はすこしも妥協せずけして正気を失わないし、同時に詩的靈感が思考を少しは前進させる、それも機械的必然性の中心でさえ、と私は主張する。それについては、デカルトはもっとも素晴らしい師である。彼は、この点ではぶっきらぼうでほとんど高慢で、自由人の名誉を強く自覚している。そして、よりよく与えるために一度後ろに下がっている。それこそ、彼の情念論の中で完璧に定義された「高邁さ」(Générosité)なのだ。

ここにそんな問題の包みがある。それを解きその内容物を並べてみる必要がある。人間を観察することに戻ろう。幾何学においてさえそうなのだが、観念を恐れる人間にはことかかないものだ。それは構想を拒み続けることから理解される。疑うことを心得ていなければならないので、その例としては有益ではあるが、結局のところ不毛な拒否でしかない。思考の意志無くしてはこの世には直線など全く存在しない、それこそ知らなくてはならない最初のことだ。次のような題しか知られていないある教条主義者の作品についてしばしば考えた。すなわち、『正しい観念と間違った観念が存在すると信じている人達への反論』というものであり、私がそれを書くことを夢見た時は、私は実に若かった。しかし、それ以外の何かが書けようか。四つの体質が少なくとも二千年前から全ての医者 of の考えを支配している。しかし、誰が胆汁質や多血質が本当に存在すると考えるだろうか。同様に、独裁制や王政や民主主義が存在すると考える者が居るだろうか。そう考えるのは鈍い術学者ぐらいのものだろう。しかし、人が間違えるのはその点ではない。私の知るかぎり、しっかりとした足取りで出発した才能のある者たちはそのような間違いに対しては用心する必要はなかったが、むしろ他の、全く反対の間違いが問題だった。すなわち、どんな観念もけして正しくないという考察の後、もはや観念を信頼する勇気を失ってしまうという間違いであった。しかしながら、なにものも曲げることのできない

この直線はけして脆いものではないし、また我々が造り出す、我々の意志にのみ依存する、同一のあるいは相似の三角形も脆くはなかった。それは支えられてこそ、支えるのだった。支えられなければ落ちた。脆い精神とは勇気を欠く精神のことであり、我々の観念とは慣習か便利な道具でしかない、あるいはライプニッツが望んだように単なる要約でしかないということによって、私は突然自分の主題に近づく。そんな精神はすこしも前進しない。前進という美しい言葉が私に警告する。というのは、思考するとは前進する事なのだ。それは勇気に拠るのだ。

宜しい。しかし、勇気の方はまた意志に拠る。それなら心は一体どこにあるのか。私が精読したオーギュスト・コントは、多くの事柄を私に教えたが、次の一つのことでもそうだ。すなわち、普通の言語生活の言葉には普通の思考が含まれており、そこにこそ最も大胆で重要な予想が存在するのだと。心という言葉はもっとも見事な曖昧さを内包している言葉だと彼が指摘するものの一つである。それは愛と勇気を一度に意味するが、同時に思考力と身体との関係を思い起こさせる。しかし、私は愛は勇気とはけして無関係なものではないということに話を限定しよう。それこそ、デカルトが、高邁さをただ直接的に豊かさ、心の湧出として名付けずに、決してたがうまいという固い決意を持った自由意志の英雄的感情と名付けたまま他の説明なしに人間の世界に教えようとするものである。勇気であり、勇気でしかないものだ、何故なら全ての証拠が反駁している。

今はその偉大な観念を解き放しておこう。ここではこの見方に従って愛を勇気の次元に引き上げることの方がより適宜であると私には思われる。なぜなら、それが肝心の点なのだ。人間の統一を再実現する必要があるのだ。敢行すること——それこそ生き方を知ることなのだ——とはどういうことか、常に繰り返し言う必要があるのだ。ついでに、これも民衆の知恵による生き生きとした表現を記しておこう。それは我々にとって充分な警告だ。すなわち、思考する名誉を愛するやいなや、もはや押し流されて生きることは問題ではないのだと。今日のところはもうこれで充分だ。すなわち、強くありたまえ。

※

(第二の手紙)

1923年4月2日

我が友よ、アトリのように愛を太陽の元で育てる詩人達により話を中断されてしまった。しかし、バルザックも『ベアトリックス』の中で、次のように言いながら愛についてより上手く語った。人が信じとりわけ口にする以上に愛には意志が働いているのだと。

この小説におけるカリストの例はよい、何故なら、一方で彼がベアトリックスに対してあらゆる障害にもかかわらず示すその情念にはなにか宿命的なものがあるし、しかし他方で、彼が自分で作り出したイメージに従ってそれを準備し温めるのが最初に示されるので分かるように、その感情にブルトン人特有の頑固さで固執していくとも言えるからだ。従って、誓いさらに名誉とでも言えるものによって、彼はそのなかに投げ込まれるのだ。こうなると、アトリとはもうなんの関係もない。

欲望・怒り・喜び・憂愁といったものが我々の肉体の中で行われる運動、一言でいえば気分といったものにいかに依存するかをあなたに説いて聞かせるのは、釈迦に説法でしょう。気分という言葉はここにぴったり当て嵌まる昔の医者言葉です。それがまた環境や天候に依存するという事は、これまたよく知られています。しかしながら、気分は肉体の動き、態度即ちその表現によってすぐに変わり、その結果、身振りが感情を真似ることによって気分を思うように生まれさせ蘇らす、それも少しも外部からではなくて、内部の力によってそうすることには、人は多分それほど気がついていないのではないか。それゆえ、舞踏や礼儀作法は広い意味

で捉えられた時、愛の中でも重要な意味を持っているのだ。しかし、このような遊戯は今度は模倣、機会そして慣習にさえ依存しているのだから、我々は再びアトリの下の次元に降りてしまった。全く頼り無く、鳩の胸の輝きのように生まれては消滅する感情は情動とでも名付けたほうがより適切なのかもしれない。結局のところ、管理したり命令したりすることなしに、ただ耐え忍ぼうとだけしている生存は、発狂者の生存に似ている。この衝撃的な考えはきっとあなたの脳裏に一度ならずも浮かんだことでしょう。これらの不安定な偶然的な情動と、ただ気分に依存し血球の数に伴い変化する発狂者のメランコリーとの間で、あなたがやらずにはおられなかった比較によって。間違いに最も欠けているのは高邁さなのだから、同様に、機会の娘であるこれらの彷徨する情動は、いつでもあのぞっとする宿命といった考えを帯びている。それでもっとも快適なものでもどこか攻撃的なところがあるのだ。そういう訳で、精神はそれらを放って置くのだ。そうすると、動物的な状態、それも狂ってしまった動物の状態に再び戻っていく。高邁な心は、様々な表情や人間関係などのために、そんな情動によってしばしば興奮させられることを免れない。しかし、高邁な心は行動的な生活の活動のなかでその情動を解消してしまうか、それらを捉え直し、ただ一つの対象に結び付けて秩序を与えたりする、それこそ人が感じる、もっと言えば深く感じると呼ぶところのものなのだ。ジュリエットがロメオを見るや否や発した「もしこの男と結婚しなかったら、私は処女のまま死ぬであろう」という崇高な言葉に見られるように。要するに、私は情動というものが、ここでは普遍的な感情という意味で、感情の次元に引き上げられるのは何らかの誓いによってであると主張する。しかるに、誓いよりも自由なものはなにもない。気分の自然な不安定さに向けられた自己制御をより適切に表現するものは他にない。真の詩人達はそれを察知した。そして、彼らの詩の決められた繰り返しの中でさえその安定性を示す。しかし、二流の詩人たちは感情と規則を両立させることを知らず、両方とも逃がしてしまう。そんな訳で、最初に詩人たちを非難したのだ。

今日のところは、何らかの忠誠なしでは感じることも出来ないという考えで止まっておこう。我々は、特にあなたは、人間的ではあるが拙劣なその考えの模倣を、巧妙に予期され待たれ望まれているとさえ言える部分的には想像上のあの苦しみの中に認める。その苦しみには、その意味で、まだ精神の刻印が押されている。インドの修道僧は次のことをよく知っている。もし人が予期することも思い出すことも止めたら、器官の痛みでさえ、現実にはすべての痛みがそういうものだが、常に消滅していく現在のその一点にほぼ帰してしまうであろうと。そして、私はクロロホルムや他の麻薬などが記憶と予期能力を奪うことによってのみ鎮痛作用があるのだとしばしば考えた。気高くそして恐ろしくもあるあなたの職業の中で、その証拠を容易に見出すでしょう。何を言いたいのか。すなわち、我々の感情とは、常に消滅しつつある時間の流れの中において、一つの探究、一連の思考それも常に意図的な身振りに伴われたものによってのみ確固たるものになるということだ。この意味において、器官の反応は持続する忠実な思考によって結合させられ呼び起こされそして型に嵌められる。この持続性は人間の心を説明するし、『ドン・キホーテ』の中ですこしも歪められずに誇張された、騎士道的な行為とあの驚くべき試練の考えに常に結び付いた人間の愛というものの発明をも説明する。

これで多分、私が高邁な心という言葉で言いたいこと、そして何故ひどく苦しむことが詰まらないことではないのか理解していただけたと思う。以上のことから、結局、すべての愛を忠誠と勇気の上に高めて、心という言葉の二つの意味を結合することになってしまう。そして、壁をも貫くあの関心もまたそれに依るのだ。しかし、あまり急ぐまい。真の跳躍の選手は棒のすぐ近くを飛ぶものだ。

※

(第三の手紙)

1923年 4 月 3 日

注意深い人よ、今度はあなたにもう一つの言葉をその全ての意味を込めて示したい。それはまた、読書力が詰まらないことではないと教える方法の一つでもあろう。ある問題に対して人が自分の気持ちはかくかくだと言うとき、それは軽薄なことを言っているのではない。反対に、人は言えるだけのことを言っているのだ。自分の考え、それも持続する真の深い考えを言っているのだ。思いつきの考えなどではない。それどころか、時には自己との対話により時には外界の知覚によりまたは行動によって、試練にかけられ試され現実と対決させられたものだ。それは自分と区別されない違和感のない思考、友のような変わらぬ思考なのだ。感情 (sentiment)、それは根を生やした思考なのだ。その言葉自体が二重の意味によって、我々が思考を肉体に合わせることを要求する。というのは、意識が戻る (reprendre sentiment) というのは、苦悩しおびえ従属的なこの実存に目覚めることでなくて一体なにを意味するであろうか。このように、魂が肉体の中に拡がっていくのは権力の回復のようなものである。開始と停止のさりげない運動のようなもので我々自身の生命を刺激することによってしか、感じ自覚することはないのである。このように指で考えるのは運動選手特有のことであり、ギリシャ彫刻が意味するのはこのことである。肉体は思考することで自らを自覚する。

このような幸福な状態はそうでなくてはならない程一般的ではない。というのは、いつの時代も、特に現代は、要約や抽象的な概念を介してほとんど肉体のない分離した思考をするからである。まるで、顔を上げないで天文学をやろうとするかのように。このような思考が何も把握しないと言うのは隠喩以上である、いやむしろ隠喩を通して真理に達するということだ。隠喩とは芸術の歴史がよく示すように避けて通れぬ人間の条件である。だから天使の真似をして肉体を牧場に残すこの人間の後を付けよう。人間の肉体は一瞬も外界の影響を受けることを止めないし、もう二つが一つのように魂が肉体に結びついているのだから、この思考家が穴だらけの自己防御や忘れられた規則によって邪魔をされじりじりし苛立ち緊張することは避けられない。この思考家は洪面を作る。

臆病は情念の母であるという、まあ平凡な意見を私は持っている。この情念という言葉の意味する所をその語源から理解して下さい。真の感情は情念よりもむしろ行動である。しかるに、臆病とは、警察が危険な場所に偶発的にしか巡回しないように思考が発作的にしか浸透しない肉体を前にした無力感のようなものである。もし肉体をどうにかしようとしてそれが手が付けられなくなるとすれば、それは実際、思考する者にとっては慰めることが出来ない屈辱である。それはあらゆる危険を前にして自己の中に敵意や裏切りを見つけ出すことだ。目眩とは自己の恐怖でしかなく、臆病とは、気にすることで倍加する目眩のようなものなのだ。そこから千もの悪が生まれる。それで不器用で窒息したような人生となる。プラトンが言ったように、それはみな体操と音楽が欠けるためなのだということは一度調べれば明白なことだ。

本によってよりもむしろフェンシングの土俵の上で魂と肉体とのこの和解をより確かに感じた。それも、フルールのたんぽ(先)で考える、敏捷な猫といった風情の老アルザス人の教育によって。その精気溢れる先生の厳しさによって、計画と実行との間に全く合間のないように同時に思考と行動をする喜びを時として知った。突きを入れたいと思うことと突きを入れることが同時だった。それが最大の速度の条件であることを経験がよく示した。さらに、フェンシングの師匠の知恵はもっと深い教訓を与えた。というのは、体の構造により命じられた技や、なそうとする技を手早くなす者を才能に恵まれた剣士と呼び、反対に、やりながら考える者、す

なわち、体全体で考える者を判断力の剣士——素晴らしい言葉だが——と呼ぶ。すなわち、この例にはあらゆる部分において感情と一致する判断がある。こうなると、すこし早すぎるとはいえ、私は次のように結論したくなる、すなわち、もっとも力強い判断は自己の中に全的な感情と生の肉体を集中させる、それゆえ、この全的覚醒により感性は、瞬時に過ぎてゆく知覚から輝くものとすばやいものを引き出すのだ。

この幸福な瞬間に人体の中で何が起きているのか、思考する人間が見抜こうとしないことは有り得ない。デカルトはそれについて生理学の要約を書いた。もし読解力があれば、それは今でもまだ権威あるものだ。ガル⁽¹⁾とブルセ⁽²⁾から全てを学んだコントは、同じ試みにおいて、いろいろな所に有るとされた機能の神話的虚構のためにひどく邪魔をされた。上述したことに従えば、判断力はどこにも位置していず、デカルトが見たように全てが、堅琴の奏者の思考では彼の指先までも、全てが判断力に協力するということが充分明らかである。感受性・行動・思考を官僚的に区別する希望をこの見方により全く失った後でも、観察するには余りに感動的なこの人体に遊びでもいいから神話的に種類の機能を分与することがまだ可能であろうか。私はあまり危険もなく出来ると思う。結合と要約の機能を数学的な額に位置づけ、真に代数的なこの部分に、ある感官から他の感官への伝達を短縮しながら概念を作成する能力——それは、運動選手においては反対に最小の筋肉でさえずりながら体全体にその確かさを伝える能力だが——を与えよう。頭の一番上の部分に、知的なものだが判断の欠けたばらばらの行動——それは職業を支えている行動だ。というのは、人は要約によって考えるように、またほとんど要約によって行動する。それはちょうど、よく起こるように、あまり心を込めずに堅琴を弾くようなものだ。——を置こう。そうなると、後頭部は濃縮してまぜあわされた、感官・筋肉・内臓を表すことになる。そこには、数段の階があり区切りもないことはなく、いわば第二の魂の貯蔵庫を形作る。さて、今となっては見抜かないとならないのだから、またあなたが見抜くままにしておくことを許したまえ。それでは、体操家よ、またあした。

※

（第四の手紙）

1923年4月5日

新しくほとんど克服不可能なこの困難の中に身を投じる前に、私は二日の間、検討した。魂と肉体との関係に関してかって私が捉えたものを整理するのにどうしてもそれだけ必要だったのだ。それは事実問題だ。いや、むしろ次のように言うべきであろう、関連する概念が勝手きままに紛糾しているような状態が止んだら、それは事実問題になると。親愛なる解剖学者よ、生理学は神経構造の機能を自分のものにしたというにはほど遠い状態にある。本当のところ、どんな医者も大変進歩した人体の知識を石器時代の精神の科学と調和させようとして努力している。それはまるで外科医が火打ち石の斧と骨の針に逆戻りするようなものです。さてと、謎はもう充分でしょう。その言葉の一つをよく理解しているあなたに、私はもう一つのことについて今回は十分に説明したいと思います。もし誤っていたら、私があなとの間違いにしていると同様に厳しく、指摘してくだされば幸いです。

古代の魂は、一寸法師である。または、人体という機械の中で操縦士か総督の役割を果たす接触不可能な分身である。全ての情動や運動の関係などが彼の所に集まり、また指示や命令がそこから出て行く。夢から生まれた、幻覚・魔法のようなこの概念はある意味でその投影を神経網・二次的中枢・大中枢の中に見出した。情報が神経を駆け巡り、あるものは病変や変調を告げあるものは防御や体操を指示するといった驚くべき神話がそこから生まれた。表面的にはそれは経験によって確認される。だからまた、実証は全てでないことが判る。というのは、も

し神経網がどこかで切れたら、あたかも操縦士が出来事の情報を与えられないか、あるいは善し悪しは別にして彼の決定を伝達出来ないかのように事態は進むからである。このようにして、素晴らしい事だが、人間中心主義は人間の理論にまで入り込んで来て、気持ち・行動・思考という神神の住む脳内のオリンポスの山まで発明してしまう。その小宇宙にジュピター・ヴィーナス・パラス⁽³⁾の顔を認めるためには、コントと共に崇敬や推論の器官やその他諸々の機能を司る器官を探したに違いない。しかし、ここには一人の人間しかいない。それは肉と骨でできた生身の人間である。操縦士とは機械それ自体なのだ。

指が痛いとき、痛いのは私だ。もっと实际的な言葉で表現してみよう。痛いのは全体であり、それは、まず指の変調がすぐに全身に影響する場合のみ可能である。さて、箱の中を探しながら、不注意にも針に刺された時の飛び上がる様を想像して欲しい。私は飛び上がる様と明確に言う。というのは、そんな時は身体全体が跳ね上がるのだ。それぞれの部分はその形とその時の姿勢に従って反応する。足はもう逃げ出しかけるが、すぐに押し留められ、同時に心臓は狂気のように激しく打つ。それで、ぶよぶよとした状態から急に変化して玉のように締まり、その付着部分を引っ張るようになる筋肉により血液は内臓や腺へと送られる。この反乱のような混乱において、人間はまず自分自身を意識しそして自分自身に脅える。これが痛みの最初の作用である。私は痛い。指の痛みはその迅速な結果である。というのは、その最初の検証や他のもっと慎重な確認の行為からすぐに次のことが分かるからだ。すなわち、指の運動やその指へのもう一つの手の運動が痛みを強めたりまたは緩和したりする。このように、気持ち全体がすぐに方向付けられ針先の一点に結集されるようになる。そして、あなたも知っていられするように、手足などを切断された人はもっとよく知っているでしょうが、痛みの意識化は、間違いなくそして掛け値なしに、気持ち全体を一点へと集中させるのです。魂を肉体に結合させるために、全ての苦痛の中には憤慨があり、愛の場合のように恥を受けた思考者の高慢がそこに加わるのだとさえ言えるでしょう。ただ、次のような違いがある。すなわち、愛の悩みでは苦痛が意識され探される場所というものが見出されず、それを外部に求めなければならないと。

刺された指の痛みが全ての他の部分にいかにも速やかに広がっていくかは、解剖学や生理学がかなり詳細に説明している。衝撃はすぐ近くの神経中枢に伝達され、ブルセが最初に分析した周囲の細胞の興奮によって近くの局部を刺激する。それはあなたの有用な道具の先でほとんど感知可能でしょう。しかし、直に中枢から中枢に防御反応やより広汎な変調を呼び起こしながら、間接的な道筋や、こういった言い方に意味があるなら直接的な道筋により、衝撃は全体に広がっていく。それで、もしこの伝達の道がどこかで切れたり、または衝撃を伝達する機能が何らかの毒物で眠らされるというような時は、全体はもはや部分とともに感じることはなく、気持ちがないので感覚は消滅するということが容易に理解されよう。これが大体わたしがそれについて知っていることだ。このことをここで発表するのは、神経中枢の中心に衝撃を苦痛に変える役割を担う一寸法師などを想定する必要は少しもないと理解してもらうためのみである。人間は人体の各部分に全体を動かすものしか感じないのだとむしろ言うだろう。そういった訳で、苦痛は指や膝よりむしろ脳に存在するなどとはけして言わないであろう。むしろ、思考が行動にのみ方向付けられて到るところにあるように、痛みも到るところに存在すると言うだろう。というのも、場所とは行動の形式でなくて何であろうか。思考と気持ちは我々の存在のなかで細胞が折り重なっているように行動のなかで編み込まれている。あなたの職業の懸念——それはあなたの運命であり、羨望されるものではないが——のなかに、行為の思い出であり残酷な考えそのものである何度も繰り返されたその指の運動を認めると賭けてもよい。さ

てと、今日のこの手紙では、私はなにやら粗野なマッサージ師じみている。お許し下さい、人間のすべてを人間に帰してやる必要があるのですから。それが私の主題なのです。

※

(第五の手紙)

1923年4月6日

軽率にも拡大してしまったこの小世界に私はすこしも留まらないであろうか。身震い・焦燥・心気症あるいは退屈の世界。しかし、どうやってそこから抜け出せるのであろうか。心ある人がどこから脱出するかを私に教えてくれる。そのような心配、それは何時も動物的な情動に還元されるのだが、それでは人間らしい生活を送れない。もっともその種の憂鬱症が予言癖によって長いこと人間界を支配してきた。世界に身震いする人間はある意味で多くのこといや全てをも知っているというのは本当である。しかしながら、その驚異的な書物を読むには傍観者が必要である。故に、勇気を持って恐怖を克服しなければならない。この行為は、我々の行動の一つ一つを始めるものだが、もしそれが抑えられれば我々の思考の誕生にも立ち会うのである。しかし、もし私がこの考えを発展させたいと思うなら、分割しなければならない。

情動から感情への移行はまず行動によってなされると思われる。それによって肉体的な動揺はまず軽蔑され次に克服されて、ついには強い行動への意志により飾り物のように仕立て上げられる。喜びに変わった苦労の余韻こそが勝利の実体となる。もちろん、そこに思考が伴わないことはない。何故ならばそうでなければ何も分からないからだ。しかし、論証が一緒のものを分けなければならない。それ故に、私はまず忘れっぽい行動であるのだ。それも、自分で暴れて自分に毒づく乳飲み子のように、乱暴なのである。

運動は筋肉から生まれる。ここから出発しなければならない。運動は神経の中心から生まれるという神話的な見方を遠ざけなければならない。人の知るところによれば、神経の働きは、興奮と同じ程に停止と抑制である。もし行動がどのようにして成功するかを見れば、この厄介な研究も多分光明を得るであろう。不器用は人間の手習いの掟である。さらに、もし、その結果にただ感心するかわりに、蜘蛛や蟻地獄や巣作りをする鳥などを詳細に観察してみれば、不器用は本能の動作にとってもさだめであることが分かると思う。人間にこだわろう。人間にとっては、どんな小さな動きも始めはぎこちないことは明白だ。そして、恐怖は、そのぎこちなさの原因であるどころか、むしろその結果なのだ。事実は次のようである。不器用者は全ての筋肉を同時に使うが、行為が完全になるのは、ダンスであれ弓であれ裁縫であれ筋肉の恐怖が鎮められて役に立たない部分は休息しているときなのであり、そこから自在さと柔軟さが出るのだ。このようにして、バイオリン演奏者は長い時間かかってやっと、先ずは歯をくいしばらなくなり、力を入れるときでもすこしの筋肉しか動かさなくなる。旗手やフェンシングの剣士も同じようにして最初の体の動揺を克服しなければならない。ここで特記しなければならないことは、貴重な習慣こそ、硬直した慣習とは全く違って、まさに最も多様な行動すなわち意志の働きかけを可能にするものである。ただここで、なんども無駄になされたことだが、行動せずただ熟慮し決定する能力として意志を神話的に解釈することを慎もう。それは、脳自体の実行力を考え、額の先に幾つかの機能を想定するようなやり方の一つでしかない。反対に、この次元の瞑想には、想像力をかき立てる筋肉の動揺や抑制されてはいるが痙攣するような全身の身振りがつきものである。音楽や体操によってまずそこから我々は開放され心の平和を得て、行動の中でのみ考え決定するようにと教えられる。この生きる知恵により運動選手に見られるような肉体の均衡が勝ち取られて、脳はもはやものごとを停滞させず、反対に保持され調和され釣り合わされたその肉体的動揺——それが幸福なあの平和を成すのだが——を自由に発露

させる。また全身全霊で目覚めることはまた完璧さの重要なしるしである。それは全身全霊でどんなささいな行動にも当たるということであり、さもなければ各運動を全体によって鍛練することであり、それは興奮と節制を同時に前提とする。例えば、呼吸系の神経の機能はふつう、知的な中心に内在する決まった様式によってではなく、むしろ他の全ての運動に合わせて胸郭の運動を制御することである。巨大な脳は広い通路とでも言えよう。

私が、自分で知らないこと、誰も知らないことについてここで述べようとしているのを見て、あなたは驚嘆するかもしれない。でも、私の思うところでは、思考と意志が鎮座する脳という神話ほど困るものはない、という理由があるのだ。それで、部分部分から知るよりも全体から推測の方がここではより賢明なのである。ギリシャ彫像は、自己主張をする中心無しに部分同士が自由に一致するその表象によって、思考の美しい一瞬を示す。それも、各部分が他の全ての部分に従属することにその思考が刻み込まれるような仕方において。そのことは特に、後ろと下に大きくなった頭と特に強調されない額に窺われる。それによって、まず代数が引きされ、幾何が名誉を回復された。この美しい像が、手を貸さずに愛さないように行動することなくけして思考するな、と告げていることを理解しない者がいるだろうか。それはヘラクレスの格言であったが、彼はそれを忘れたので、死んだ。人がカトリックと呼ぶ、愛と思考の偉大な革命は勇気から形成されなければならなかったと言ってもいいくらいだ。それ故に、それらの永遠の彫像が我々を深く感動させるのだ。私は何かを解きほぐしたであろうか。あなたは、友であるその美しいイメージに立ち戻るためにこの説教を果たして予期していたでしょうか。

※

(第六の手紙)

1923年4月7日

さて、強引な人よ、この手紙が一つの論を成すかのように秩序立つようにしましょう。それを望んだのはあなたです。もっとも、まったく私的に口論の心配もせずそのことについて書くこの機会を私もまんざらに思っておりません。それで、「崇高」(Sublime)について論じる羽目になりました。もっとも次の二つの理由でそうならざるを得なかったのでしょうか。まず、崇高さはもっとも高貴な感情に特有のものであるからです。さらには、これが特に重要ですが、それは全ての人間の中にあり、それが欠けた情念などはいつも情動へと戻り、前に説明したようについには、その情動を反映する精神により心気症になってしまうからです。

しかし、崇高とはいったい何でしょうか。運よく、我々はそれを知っています。あの著名なカントは脊椎の如き観念をけして見逃しませんでした。いかなる物も崇高ではありません。巨大で圧倒的な物は、見事に死ぬために精神を集中している、弱いが不屈の思考者を考慮に入れるときのみ崇高であると言えます。すなわち、崇高さとは意志することなのだ、しかも、通行可能の道をたどって行くといった普通の意志ではない。そうではなく、熟慮と精神の結集によるもので、全ての希望を負った緊張した意志である。このようにして、あらゆる部分に他の部分に対する容易な制御力を与える、運動選手におけるあの集中によって、自由な自己の気持ちは生まれる。それは、人間が幼年時代から抜け出すや否や、健康の全てである。

その反対として、ヘーゲルが言いたかったように、病気の全てについて次のように言おう。すなわち、それは分離あるいは分裂なのであり、筋肉と神経組織の共和国における特殊で専制的な力の様なものである。それゆえにそれは侮辱し直に怒らせる。病気の本質は怒りと絶望が一緒になったものだから、あなたによく知られている支離滅裂な熱狂により、いつも一種の狂気に行き着く。一方、そこには無数の段階があり、崇高な「忠誠」(Fidélité)の不在により感情が生まれる先から消えてしまうような中間的な段階では、倦怠が巣くっている。というのは、

止めてしまうこと、即ち自分を諦めてしまうための理由は幾らでもあり、根底のところには、世の中に関しては全てが運命的であるという悪魔的な理由がある。そして、実際、認めてしまえば全てはその通りである。それゆえに、逆に、「立ったまま死のう」という皇帝の言葉は崇高さのよい例なのである。

さて、この力強い反応はあらゆる瞬間にある。それゆえに、私の師匠ラニョーの次の言葉をまた崇高であると思うのである。「存在するか存在しないか、自己と万象、選ばねばならない」。もっとも、この美しい文の深い意味は、寛大な気持ちとは思考をも内包していることを理解して初めて把握されるものであるが。そこに是非とも到達しなければならぬであろう。しかし、今日は普通の愛に限定しよう。私は、もはや愛さないと決めてかかり、愛を密かに待ち望むと言うことが愛することなのかを問う。そのような見張って自己防御する状態は反対に完全な軽蔑である。この考察から、愛の情念の戯れやおうおうにしてそこに顔を出す殺気だった怒りがかなり説明される。というのは、同意を得ていない者は何もつかんでいないからだ。彼は愛を陽光や雨のように受け入れる。自分を賭けないで愛する者は自己を疎外し囚人のように感じる。そこから、両方とも屈辱感が生まれ、目の奥には敵意が覗くのだ。そこで、けして間違えることなく、愛するためには意志することが必要なのだと結論する。敢えて意志してみること。人は意志することが出来るのだと敢えて信じる。音楽やら高飛びなどどんなものに対する愛についても私はそのように言う。始めは意志によってのみ支えられた希望が必要なのだ。というのも、全てが我々を意志することから遠ざけようとする。いわゆる愛と呼ばれるものに関しては尚更である。そこでは、信念の欠けた眼差しは相手から信念と希望を奪うように作用するのだ。自己欺瞞(mauvaise foi)と言うが、その表現の深い意味は、人が自分に自信を持っていないということなのだ。反対に、愛する勇氣は優雅さの交流を生み出すし、優雅さ(grâce)は、それこそ最も美しい言葉の一つで、褒美と感謝を同時に意味する。しかもそこに、自由で伸びやかな何ものかを付加しながら。それで、言葉の十全な意味での、身体の活性化とあらゆる仕種に気持ちを入れることを意味する。そして反対に、恐怖はいかなる国でも醜い。それで、優雅さのない美は大理石にのみ見られるけれども、生き物は、存在の奇跡である受けられ返される優雅さにより大理石に勝つのである。羞恥はその期待でしかない。というのは、羞恥は情動の拒否であり希望における崇高さであるからだ。このように、愛とはなにはともあれ詩人なのである。

※

(第七の手紙)

1923年4月7日

思考の優雅さもある。悲しい情念がその反対であることは、もっとも在り来りの経験がずっと以前から示して来たものだ。そして、その意味でこそ、観察者の目は涙で曇らされてはならないと正当に繰り返されてきたのである。そうなると、正しく考えるためには何物も愛してはならないとなろう。しかし、愛もさまざまである。それに、愛と憎しみを区別せねばならないであろう。それは、私がコントの中に見つけたもので、私の知るかぎり他のどこにも無かった。ここにその一部を書き写したい。「人は愛が盲目だと非難して、憎悪が愛以上に、ずっと有害な程に盲目であることを忘れる」。しかしながら、それでもまだ十分言い尽くしていない。私は寛大な愛について描写したが、愛はそんなに間違いを犯す必要はないとあなたは考えているかもしれない。何故ならば、愛は自ら望むものを存在させるのだから。それは想定するよりずっといいことだ。さらに、憎悪についてもまた、新しい意味で私が自己欺瞞と呼んだものをそのイメージ通りに生み出し、自分が捜しているあらゆる証拠を生じさせて、憎悪はほとんど

間違えたりしないものだ、と言わねばならないだろう。しかし、人間世界では、人は真理を見出すのではなく、それを造り出すのだ。私が見てきた限りでは、人間は自分が他人を実際以上によく又は悪く評価して犯した間違いを償おうと急ぐ。そのことについて、前に説明しようとしたことに従って、今わたしが言わなければならないたった一つのことは悪を見る者は分離や否定といった、たわいのないことをのみ見て肝心の存在を見ない、ということだ。しかしながらここでは、真理と善との隣合わせというまたとない手を持っていることになろう。それに、あなたがしたいと思ったのはこの質問ではないでしょう。あなたが知りたいと思ったのは一体どんな意味で次のように言えるのかと言うことでしょう。すなわち、物質的で非人間的なもの、すなわち我々の気を引くためにも反対に我々の不興を買うためにも変わったりすることは決してなくいつもあるがままであるものを捉えるのにどうして最も寛大な心が最適なのだと。

というのは結局、太陽への距離と公転の時間の簡潔な関係を発見したいというケプラーの願いは惑星の速度を少しも変化させなかった、からだ。ただ測定すればよかったので、希望はそこでは無益であった。しかしながら、この有名な例は、少なくとも一度は敬虔さが探究を軌道に乗せたことを理解させるのには都合がよい、なぜなら、あなたもさっしがつくように、時間の2乗と長軸の3乗との明確な関係をそれまで得られていた数字は厳密には証明していなかった。私は少なくとも一度はというが、きっと一度以上だろう。アリストテレスよりずっと以前の古人もアリストテレスもいにしえから崇められていた天体が円を描くことを望んでいたのだ、なぜならば、彼らが言っていたようにその完璧な図形こそ神神に相応しいからだ。そして、この仮定はほぼ正確で、より適切な仮定である楕円が円と近縁である意味で、彼らを正しい道に導いたのであった。しかし、ここで問題の核心に直面する。というのは、天体は決して楕円もいかなる閉じた曲線も描かない、何故ならばそれは太陽と共にヘラクレス星座の方向に漂流しているからだ。このようにして、私が最初に予め書いたことが再び意味をもつ。即ち、我々の概念は、物に接近するための道具であり実際その軸がそうであるように基準であるのだ。そして、それら全ては幾何学者の意志によって描かれ維持されているのはかなりはっきりしたことである。

しかしながら、遊びの幾何学もある。慣例の遵守は強固で寛大な自己規制に依ることはもっともだとしても、その慣例が他のものより価値があるかどうか敢えて決めることができない、意気地無しの幾何学者達も少なくない。彼らにおいて一般的な、危険なくして理解しようという習慣の帰結としてのこの判断の停止は、私によれば、全存在を賭けないことに起因している。頭が腹とが十分に通じていないので、彼らの身体は健康ではない。ルクレティウス⁽⁴⁾はもっと美しい、彼は、命に賭けても知覚しようとし、そのことによって狂った想像力を減じさせることを目指している。そして、我々人間の条件は次のようなものだ。すなわち、幾何学的・機械的予想は、それが日月食・火山・雷に関して仮説になり得ても、幸福にとっては全く通用しないということだ。それでこの真理を発見するための武器は人間の勇気によって支えられなければ、まず何の力もない。それで、最初の自然学であり全ての自然学の母なるものはもちろん詩であった。それに、今日あなたに注意をしてほしいのはこの点です。というのは、真の科学とは統制するものなのであり、私が描いた原初の夢から自由になろうと常に努めるものなのです。その夢とは、全てがいっしょくたんになり、克服しえない運命という考えの下に、私が結局はそのまま受け取らねばならぬ外的必然性と、出来るだけ上手く統治しなければならない私自身の王国が渾然一体となっているものなのです。気違いは自分の体しか知覚せず、自分の夢を世界と思う。私が前にも申したように、そこには一種の真理があります。なぜなら、彼のような

状態では、その知覚の世界が現れないようにすることは出来ないからです。もっと上手く言いましょう。間違いが世界だとするその知覚の世界の他は何も誰にも与えられないのです。例えば私には直角に見えない立方体の角の知覚。星の出と入りの知覚。月よりも大きくない太陽の知覚。この復活祭の月において私がまたも観察したように、地平線では天頂よりも大きい月の知覚。その月はどうしてもそのように私には見えてしまった。しかし、そのように見えてはいないのだと知っていた。また、もし月が正当に見えたとしても、見えるように月を考えてはいけないことを知っていたから、問題は解決しなかった。また、あなたも御存知の通り、真の月は誰もけして目で見たものはいないのだし、太陽も同じことだ。この単純な例を軽視すべきではない。もっと身近な物においては、これほど厳しい教訓を受けることは恐らく無いであろうし、事を始めようというせっかちな気持ちが知ることを妨げてしまうでしょう。実際に、手の届かない天体を通して解放が始まったのです。そこを通してこそ、事実と欲望の分離が——それは意志の最初の勝利でしたが——成されたのです。月を死んだと騒ぐ群衆の錯乱がそこに導かなかったことはかなり明確でしょう。それに月の再出現も彼らを騙したのです。自制力が何処まで通用するのか知るためには、正に強い自制力が必要なのです。そして、祈りの及ばない所に何かがあることを知るのは運動選手に相応しいでしょう。（以下、続稿）

注

- (1) GALL (Franz Joseph) 1758年生、1828年没。ドイツ人で医者。ウィーンやパリで教鞭をとる。脳の外観から、その機能及び機能別位置づけを研究し、それを人間精神探究の基礎としようとした。
- (2) BROUSSAIS (François) 1772年生、1838年没。フランス人で医者。生体組織の炎症を病気の唯一の原因とする理論を展開し、それを心理学の分野にまで応用しようとした。
- (3) PALLAS ATHENAの別称。ギリシャ神話における戦いと知恵の神で、ギリシャの首都のアテネの名称の起源。
- (4) LUCRECE 前96年頃から55年頃。ローマの詩人で哲学者。エピクロス主義者。